

# シリーズ「<sup>たぶんかきょうせい</sup>多文化共生と<sup>ちい</sup>小さな<sup>せかいとし</sup>世界都市を<sup>かた</sup>語るシンポジウム」

4回目 <sup>かいめ</sup> 4回目 テーマ <sup>せいしょうねん</sup> 青少年の<sup>こくさいりかい</sup>国際理解

～<sup>いいだ</sup>飯田の<sup>しょうらい</sup>将来を<sup>にな</sup>担う<sup>こ</sup>子どもたちに<sup>たく</sup>託して～

H30. 5.27 13:00～

於： 飯田市役所3階会議室



## 横田会長挨拶

多文化共生といっても簡単には解ってもらえない。飯田市でも公民館と協働で数年カンボジアへ高校生を送っている。これから国際交流は青少年の育成を中心になっていく。ユニークな日本の中でも特色ある飯田市を作っていきたいと思っている。

## 三石副会長

本日でシンポジウムは4回目となる。

- 1回目 リニアの時代と飯田下伊那の人口減少を考える
- 2回目 市民が考える、地域コミュニティ・多文化共生
- 3回目 外国人住民から見た飯田下伊那～この地域は働きやすい？暮らしやすい？～

今回のテーマは「青少年の国際理解～飯田の将来を担う子どもたちに託して～」

<sup>いがらしょうがっこう</sup> 伊賀良小学校 <sup>きょうとう</sup> 教頭 <sup>おおのせいじ</sup> 大野征二さん

<sup>いいだにしちゅうがっこう</sup> 飯田西中学校 <sup>きょうとう</sup> 教頭 <sup>くぼた</sup> 久保田みどりさん

<sup>しもいなのおぎょうこうこう</sup> 下伊那農業高校 <sup>かいちよう</sup> インターアクトクラブ会長 <sup>やまざきあきと</sup> 山崎暁登さん

<sup>こうざい</sup> (公財) AFS日本協会 <sup>にほんきょうかいはがのなんしんしぶ</sup> 長野信支部 <sup>しぶちよう</sup> 支部長 <sup>ながさかなつこ</sup> 長坂菜摘子さん

コーディネーターは <sup>いいだこくさいこうりゆうすいしんきょうかい</sup> 飯田国際交流推進協会 <sup>ふくかいちよう</sup> 副会長 <sup>よしざわ ゆ み こ</sup> 吉澤裕美子さん

## 吉澤コーディネーター

小さな世界都市の中の基本的な部分、国際交流、国際理解というのを取り上げている。4人の実践されている皆さん、教育に携わっている皆さんをお迎えした。これからの取組みとか考え方に繋げていく機会になればいい。

## <sup>だいいちぶ</sup> 第一部 <sup>わだいていきよう</sup> 話題提供

### 1.それぞれの活動現場における目的・内容について

#### 伊賀良小学校 大野教頭先生

伊賀良小は飯田市で一番大きい小学校で現在の子どもの数は902人。今、中国とフィリピンとベトナムとブラジルの方がいる。日本語が全くわからない生徒もいるし、お家の方も同じ状態ということがある。その中でコミュニケーションを取る必要性があるが、準備が整っていなくともすでに始まっているという状態。

伊賀良小学校は、飯田市では唯一英語の専科の先生がいる小学校。隣の山本小学校にも週2日行き英語の授業を始めている。「英語に親しむ授業」を3・4年生にもっていき、5・6年生は「英語」という授業を先行実施している。今年一年かけてカリキュラムをきちんと整備し、他の多くの学校の英語の授業の元となっていければと考えている。

「主体的・対話的で深い学びを実現しよう」と取り組んでいる。何かの課題に向かって、一緒になって考え一緒に課題を解決していくということを大事にし、その中で子ども同士で対話をしながら考えをより広げ深めていくことをやっている。友だちの考えを聞き、自分の考えを友だちに伝え、一緒に考えて解決できた時の喜びを味わって欲しいと考えている。

国際理解ということに向かっていくその基礎として、相手のことを知りたい、相手に自分のことを知ってほしいと思える子に育ち、分かり合えた喜びを味わってほしい。そういうことを大切にしている小学校では日々の学習活動に取り組んでいる。

#### 吉澤コーディネーター

一番基本的な部分を教育の基本的な小学校でやっていただいている。

#### 飯田西中学校教頭 久保田みどりさん

私は、根っから飯田で育った人間。丸山小、西中を卒業して母校に勤めている。

今年の西中で力を入れていること、具体的には3つ

- ① 粘り強く学習する
- ② 自分の良さを発見する
- ③ 地域に貢献する

この3つを柱に子どもたちの指導を進めている。丸山小・飯田西中はコミュニティスクールの学校運営協議会と一緒に、9年間の子どもたちの育ちをイメージしながら小学校と中学校が連携して指導にあたることができる。

特にキャリア教育に力を入れていて、今、伊賀良小からも話があったが子どもたちが自分で伝えていく力を大切にしている。地域学習として、丸山・羽場地域の運動会に実行委員という立場で参加させてもらい、大人側の立場に立って普段学校では経験できないような活動も体験させてもらっている。

全校生徒数は240名前後、外国籍の子どもは5%前後で10名少し。主にはブラジルが多くフィリピン・中国の子もいる。外国籍だからという理由でのトラブルは、見えている範囲ではほとんど無いと思われる。自然と子どもたちが一緒に楽しんでいる様子が受け取れる。

#### 吉澤コーディネーター

外国籍の子どもだからということで理解されなかったり特別扱いを受けたりということが今は無いのではないかと。

次に、唯一の学生、自分自身が国際理解、国際交流を主体的に体験している、考えてやっている青少年のお話し。

#### 下伊那農業高校 インターアクトクラブ会長 山崎暁登さん

最初にインターアクトクラブについて説明させていただく、下農の場合は飯田東ロータリークラブから資金面を含めて全面的な活動支援してもらっている。地域での活動や国際理解、この2つを柱に活動をしている高校生のボランティアクラブ。普通の高校生では体験できないことを体験させてもらっている。

県内のインターアクトクラブの集まりの中で交換留学生を交えた交流など行う。信州大学の交流会は、2日間に亘って様々な国の方とグループ毎にレクや食事など様々な活動を通じて交流をする。一緒に活動しているうちに、自分から積極的に英語ではなくてもコミュニケーションをどうにかとろうとするようになる。

交換留学から帰って来たインターアクトクラブ員の報告会では、もちろん英語力がついたというのと、1番はコミュニケーション能力がついて、英語を使うことに抵抗を覚えなくなったという感想が述べられている。これが様々な活動を通じて得られた成果である。

#### 吉澤コーディネーター

伊賀良小、西中、下農のインターアクトクラブの活動からコミュニケーションという言葉がどこからも出されている。

#### AFS 日本協会長野南信支部 支部長 長坂菜摘子さん

AFSとはAmerican Field Service（アメリカン・フィールド・サービス）の略。元は2つの世界大戦の救護部隊に未成年の若者を動員して敵味方の隔てなく傷病兵を救護したボランティア組織に端を発する。具体的な活動として高校生の交換留学事業を中心とした異文化理解プログラムを企画実施している。

日本での活動は65年前に8名の若者がアメリカに留学したことに始まり、昨年は外国からの留学生（年間生）受け入れ数は240名。日本から外国への留生は380名。アメリカやオーストラリアのような英語圏だけではなく、アジア中南米そういった国にも派遣先がある。

長野南信支部は今年で19年目を迎える。昨年は松本以南の長野南信支部管轄内では外国からの受入れは年間5名、日本からの派遣は11名であった。飯田下伊那では現在、飯田風越にスリランカの女子生、飯田高校にドイツからの男子生を受け入れている。この夏、飯田下伊那から世界へ出発する生徒は5名予定。これは通学プログラムで現地の家庭に受け入れてもらうホストファミリー制度を前提にしている、どちらもAFSの理念に賛同してもらい、無償のボランティアでの受入れをしてもらっている。

#### 吉澤コーディネーター

高校生のような青少年を通して交換留学を実践している団体ということ。

## 2. 活動を通して見られた青少年のようすと成果

#### 伊賀良小学校大野教頭先生

子どもたちにとっては外国籍の子も日本国籍の子も、同じクラスの仲間であって我々が思っているほど壁を持っていない。そういう段階で関わるのは大事なことと思う。一人ひとりが多文化だと思う。それぞれが違った家庭、環境で育ててその子たちが一つの部屋で一緒に学習する。その中で自分のことをどう伝えるかどうわかるかということが大きくなっていく。

授業参観の日に全校で校長先生が道徳の授業を行った。“まごころ”ってどういうことかと生徒に問いかけた。反応はシーンとするどころか、どんどん手が上がりそれぞれの意見を言える。参加日だったので、同席していたPTA役員の方が驚かれた。900人いる子どもたちが、全校の前で発表し、他の子が真剣に聞き入っていた。解ろ

うとしている、伝えようとしている。今の子のできることに驚いていた。成果とはそういうことだと思う。

今、ベトナム籍の子でまったく日本語がわからない子が来ている。クラスの子が、仕草で伝えているが、その子は自分ばかり注意されていると勘違いしていた。どうすれば相手に伝わるか、このクラスで学べるチャンスだと思っている。

#### 吉澤コーディネーター

伊賀良小学校では、言葉だけではないコミュニケーション、子どもたちに伝える力をつける取組みをされている。

#### 飯田西中学校久保田教頭先生

思春期真っただ中の3年間を大事に育てていきたい。

体験が入った学習が大事、地域のお年寄りのお家へ行って草取りをする、一緒にお茶を飲む、このような地域貢献を3年生が行っている。お年寄りとのコミュニケーションに戸惑う子もいれば、お家のお年寄りと同じようにできる子もいる。コミュニケーションが取れないのが悪いのではなく、自分を知ることが大切なこと。

子どもたちの発案で羽場地区ウオーラリー大会に実行委員として参加している。「休みの日に大人がこんなに汗をかいて一生懸命準備している姿にちょっと疑問を抱いたが、当日実行委員として活動するなかで、小学生が喜んで参加してくれる姿をみて、こういう思いができてこそ頑張れるということを学べた」という感想があった。

コミュニケーションの学習のなかで、西中ではピアサポートという学習をしている。(ピア：仲間、サポート：支援) 人との関わり方は昔なら学校で学ばなくてもできていた。子どもたちの感想は「話をするのがコミュニケーションと思っていたが話をする以外にコミュニケーションがあるのに驚いている。」

今年度、6月28日に半日中国の生徒80名の西中での受入を計画している。授業を一緒に受けてもらい、その中で子どもたちがどんなコミュニケーションを取って関わっていくのか楽しみ。

#### 吉澤コーディネーター

ポイントとなる言葉「体験・地域・コミュニケーション」ピアサポートという学習が出された。仲間同士の支援のありがた、人との関わり方を教えていただいた。

#### 下伊那農業高校 山崎さん

外国の方を交えた交流会とか、自国のことを紹介してもらおう場というのは国際理解、相互理解を深めるためには有効だと思う。2年間インターアクトクラブで活動してみて思うのは、実際の外国の方との交流は多文化共生に必要である。

インターアクトクラブの活動として地域奉仕がある。福祉施設や乳児院などの施設訪問や、地域のイベントに参加するなど活動をしている。活動の中で色々な人と関わりを持てる。一人ひとりが違って、高校でも、クラブ員を見ても違う文化を持っている。国籍・性別・年齢それぞれの違う文化を持っていることを理解することが大事だと思う。

国際理解を深めるには外国の方との交流はもちろんだが飯田の中でも色々な人がいることを知る。そういう人と関わりを持つことがコミュニケーション能力や色々な考え方を知るためには有効だと思う。

小中学校の取組みを話していただいたが、色々な取組みが今の自分に繋がっていると高校生の自分は思っている。

### 吉澤コーディネーター

山崎さんは高校に入る前は、関わりや学習はどうだったか。

### 下伊那農業高校 山崎さん

自分から積極的に参加するタイプではなかった。先生方の作ってくれた機会しか参加していなかった。

インターアクトクラブに入ったきっかけは姉の紹介という簡単な理由だったが、活動をしてみたら色々な人と関わるのが楽しくなった。きっかけは何でも活動を通じて色々な人に関われたのが今に繋がっている。

### コーディネーター吉澤さん

小中学校で先生が仕組んでくれた枠の中では積極的でなかったけれど、高校生になってから山崎さんの心の根っこにあったものが今生きているのではないかと。地域やコミュニケーション、人との関わりが大切ということが伝わってきた。

### AFS 長坂さん

3人の皆さんと共通している。多文化共生というと国境を越えたものとイメージしやすいが、たとえば都会と地方都市の文化は違う。世代の違い、男性と女性も違う。違いは違いで認め合うことがAFSのスタンスになっている。毎日の生活の中ではどこかで折り合いをつけなければならない、文化の違う10人の留学生がいれば10通りの解決方法があると思う。

日本は「以心伝心」という文化があるが、まったく通じない国もたくさんある。言葉で伝えてほしかったという場合もある。それぞれの文化だからどちらがいけないとかはない。留学生には、この1年間はこの国の文化を学びに来ているのだから、ちょっと頑張って真似でもいいから「以心伝心」をやってみないかと伝えている。

留学生はたった一人で親元を離れて来ているのだから、その心細さ、頼りなさを理解してほしいとお願いしている。生徒が適応していくのを待っていてあげてほしい。両方の歩み寄りが必要だと思う。

英語ができないからとホストファミリーを断る方がいるが、生徒は日本語を学びに来ているので、かえって英語が話せる人がいると日本語が上達しないことが多い。言葉で伝える中身が大事かと思う。

日本から世界に留学する生徒に、自国の文化を伝えられるように学ぶことが大切と言っている。言語はツール、自国の文化を理解して伝える、伝えたい「何か」があること、学びたい「何か」があることで初めて言語学習上達するものである。

自国の文化を知ることで若い人たちの自己肯定感も高まる。世界の若者に比べて日本の若者の自己肯定感は非常に低いと聞いている。日本人であること飯田の生まれであることを胸を張って言える若い人たちを周りの大人たちがサポートしてあげられたらいいと思う。

### 吉澤コーディネーター

言語は大事である、でもそれがすべてではない。言語以外でのコミュニケーション能力がどう育っていくのかというところ。

年代もジェンダーも地域も全部違って、違いは違いでいいんだと、認めたくなくて歩み寄りが大事なのではないかという話だった。青少年だけではなく、私自身も自己肯定感とか自国の文化を自分の言葉で語って伝える力のなさを痛感している。

### 3.今後さらに期待される青少年の姿／国際感覚豊かな青少年を育てるために望まれる他機関との連携の方法、内容

#### 伊賀良小学校 大野教頭先生

伊賀良小でも中国の旅行団の方を授業にお迎えした。その時の児童の日記「3時間目は一緒に算数の授業をしました。勇気を出して近くまで行ってみたら、言葉が通じなくて困っているようです。私は身振り手振りで一生懸命教えました。すると伝わったようで図形が完成しました。中国と日本では言葉も文化も違うけれど一生懸命やれば何でも伝わるとことを知りました。これは私にとって大きな成長に感じました。」こういうことを感じてほしい。

山崎さんの話にもあったが、色々な伝え方を体験を通して学びながら分かり合えた喜びを味わいたいと思っている。

長坂さんの話で「言葉で伝える中身が大事」という話が心に残っている。書くことがないのに書かされるから作文が嫌いと思う人が多いが、伝えたい中身があることが大事。現在の小学校の国語の教科書では、そういうところも大事にしている、作文だけではなく、皆の前で話す、絵やグラフを使って話す、など、プレゼンテーション方式の授業が増えている。

子どもたちが他の子どもの考えを聞きたい、自分の考えを伝えたい、お互いに考えをやり取りしたいと思う、分かり合えて良かったと思う、そういう活動を計画的にきちんと仕組んでいくということ、伝えたい中身がまず大事ということ、そういう思いを持って人に当たることを大事にしていきたいと思っている。

#### 吉澤コーディネーター

お互いが解りあえた喜びを味わうために学校の学習の中で場面、仕組みを設定している。高度なコミュニケーション能力を育てる一番大切な部分と感じた。

#### 西中 久保田先生

中学校は生徒指導が大変そうと外部から聞くと、実際自己主張が通らずいざこざがあったりすると、大人目線で良い悪い、誰が原因かというところに行くが、我が校では子どもの思いをしっかりと聴き取ることが一番大事ということで取り組んでいる。

例として、授業に出席していなかった子どもへの指導をする場合も、その行為が良い悪いということは後で指導するが、まずは思いをしっかりと聴き、聴いてくれる人がいること、語れる子どもであるということこの難しい時期を乗り切ってほしいと思っている。

支援学級の3年生と1年生の男子生徒が喧嘩すると3年生が悪者になる。お互いに、相手が何に怒ったかどうということ腹が立ったかを書き出してみた。3年生がたくさん挙げてくれた。「さすが3年生、1年生の気持ちが解っているね」と褒めてあげたら、それを聞いて対等にけんかしたことがまずかったという思いになってくれた。

自分と合わない、うまく関われないという人に出会った時に、その原因を相手に持っていくか、自分がそういうタイプの相手を受け入れるまでに育ってないと受け取るか、その差が大きいという話を子どもたちに行っている。一人ひとりが違う文化を持っていること、それを理解することが大事。

山崎さんのような高校生にうちの中学生もなってくれたらいいなと思う。相手と自分は当然違う、考え方も違う、色々なことが違うことを理解できるそんな子どもたち

になってくれることが、外国の方や体の不自由な方に出会ったとき、自分の態度言動を振り返る。そんな大事な機会になると思う。このことは人権教育と縁が切れない。国際感覚の前に人権感覚を大事にし、子どもたちの思いを大人がしっかり受け止め、子どもたちの力を伸ばしていければいい。

#### 吉澤コーディネーター

「国際感覚」その言葉の前に「人権感覚」というところから中学校では取り組んでいる。子どもの思いを聴くところから、その人が自分を語れる場面を作る、お互いが理解し合える、自分を受け入れてもらえる相手とのコミュニケーションができるという、まさに大事な部分に行き着く。

#### 下伊那農業高等学校 山崎さん

高校に入ってインターアクトクラブに入ったことで色々な方と関わって自分のためになった。

高校生、もっと言えば小・中学校のうちから色々な人と関わることによって色々な考えを知る機会をつくってほしい。自分はインターアクトクラブを知ったことによって色々な活動ができたが、普通の高校生がもっと自分のような活動ができるきっかけ、機会を頂けたらと思う。自分の体験をもっと他の人にも経験してほしい。

そのためには、最初は大人や先生方の協力が必要。先ほど、小・中学校の活動を紹介していただいたが、全ての枠組みを大人が決めるのではなく、機会を用意してもらってその中で自分たちがどう動けるか考えられると、臨機応変に対応できる力が付くと思う。

さっき、自己肯定感という話があったが、このシンポジウムもそうだが、どういう活動をしたとか、どう思ったかを聴いてくれる人がいると自信につながる。

大人が、高校生も含めた子どものそういう機会をどんどん増やして、その中で高校生、青少年がどう動けるかというのが今後多文化共生に向けて有効かと思う。そのために、小学校、中学校、高校、一般の人たちも含めて、情報交換する場が少ないと感じているので、そういう機会をもっと持てれば色々な人がそれをきっかけに気づくと思うので、そういう考えが広がっていくことを期待している。

#### 吉澤コーディネーター

国際交流推進協会のイベントに「国際交流のタベ」という大きな取り組みがあるが、山崎さんたちのような体験や考えを身に着けた生徒さんたちが積極的主体的に関わってくれている、というとても良い状況が生まれている。

まずは、大人が枠組み、機会を作る中で体験したこと考えたことが主体的に動けるものに将来的には繋がっていくということ、一貫して語られていると感じた。

#### 長坂さん

リニアの時代には、山崎さんのような方が第一線で活躍される時代だと思うので、是非そういう若い人たちにどんどん経験の場を与えてあげたいと思う。未来のためにも、上の世代の人たちが「思い切ってやっていいよ。失敗したらこっちがフォローするから。」と言ってどんどん活躍してほしい。

異なる文化に出会うとまず「拒否」から始まる。どこかで折り合いをつけて受け入れていく、または慣れていく。文化は暮らし、生活。異文化に適應するのは少しずつ。朝シャワーにこだわっていた生徒が、季節が寒くなるにつれ温泉にハマってしまった、ハグがないと冷たいと言っていた生徒が日本のお辞儀に心がこもったものを感じ

じる、ステーキが恋しいと言っていたアメリカの生徒がサバの味噌煮が大好きになってホストマザーに作りかたを習って帰る。これらはみな本当にあったこと。そして、一朝一夕には成し遂げられなかったこと。1年間いることでお互いに学び合ったもの。

ホストファミリー経験をぜひしてほしい。日本の生徒に海外留学を経験してほしいが、全員が経験することは難しい。ホストファミリーが一人の生徒を受け入れることで回りの人たちに異文化体験が無限大に広がっていく。

4月30日の来年の留学参加希望者のための説明会のおり、パネルディスカッションで発表したドイツでの1年間の留学を終えた生徒の発言を紹介する。

「日本にいては考えもしないことを考え、経験し、貴重な10ヶ月間だったと思います。今はまだあの時の経験が役立っているとか、本当に意味があったのか、はっきりとはわかりません。それでも、確実に無駄ではなかったと言い切れます。留学はただ文化を知るとか言葉が話せるようになるためではありません。きっとそれを実感できるのは、留学を終えて日本に戻ってきてからだと思います。私は留学というものが将来グローバルに働きたい人や外国語系の大学に行きたい人のためにあるとは思わないので、是非沢山の高校生の皆さんに経験してもらいたいです。強い意志を持って留学をすれば、必ず自分自身を成長させてくれるものになります。楽しいだけのものではありませんが価値のあるものです。是非挑戦してみてください。応援しています」

これを聞いて後輩の子が留学に弾みがついたそう。若い人たちが場を与えられて発信するということは、エネルギーなことであり人に届くものも多い。是非山崎さんのような高校生が多く出てきてほしい。

## 吉澤コーディネーター

小学校、中学校で枠組みの中で教育を受け育てられ、高校生になって改めて自分たちで考え主体的に動けるようになり、さらに日本人の生徒が留学することで育っている。

## 第二部 意見交換会

4つのグループに分かれて意見交換会后、グループ毎に発表

### ○（大野先生を中心としたグループ）

本田さん：小学校の先生、中学校の先生、生徒さん、地域で活動されている皆さんが枠を超えてこういう話し合いができて大変よかった。それぞれの意見が聞けてためになり、新たに気づかされることがたくさんあった。子どもたちは多国籍を意識していない、異文化を受け入れることをしている。どうやら、大人のほうが解っていないくて変わっていかなければいけないんじゃないかと思う。

学生が体験をすることで変わった、新たな気づきもあって成長できたとの意見。そういう機会、体験する場所、シチュエーションが数多くあった方がいいんじゃないか。地域において、国際交流又は異文化を理解したり社会を理解する場が多いほど、学校でも地域でも家庭でも体験できる。

キャリア教育、ピアサポートなど、昔の管理教育、出口教育ではない。認識が完全に遅れていると実感した。学校教育も頑張っている。すべての学校ではないかもしれないが、切磋琢磨していい子どもだちを育てるために学校は努力するという決意表明をしていただいた。



地域、公民館も頑張っているし、大人も変わっていかなくてはいけないんだということを改めて感じさせてもらった。

PTAの副会長から、親の背中、特に男親が、教育の場に出て行って汗を流す姿を見せるべきではないかと話をいただいた。学校でできること 地域でできること家庭でできること、皆で見守っていきたい。

言語に関しては色々な苦悩があるということだが、先ほどの長坂さんのお話にもあったように、言語に頼らないコミュニケーションもある。日本語を学んでいる学生と触れ合うことで相手の国の事を理解するという見方もある。

#### K（久保田先生を中心としたグループ）

熊谷さん： 30年前に外国籍の方を1年間ホストファミリーとして受けた話など聞かせていただいた。

若い世代が垣根を越えて交流している。国際交流の大人たちが心配しなくても垣根を超えた交流が広がっている。それを包みこむような飯田の地域性があるんだということを共通認識した。

若い人をもっと外に送り出して色々な感覚を養ってもらってそれを持ち帰ってもらって当たり前のように垣根の無い社会を作っていってもらいたい。そんな期待を感じた。

#### Y（山崎さんを中心としたグループ）

三石さん： 我々大人は偏見を持ちながら生きてきたのかなと思うが、小さいころ外国の人を見たことがなかったので、アメリカ人の旅行者にサインをもらいに行った覚えがあるが、今の子どもたちは小さい頃から外国の人に接してきているのでさすがに考え方が違う。

ただ、先ほどから山崎さんが言っているように外国の人と知り合える機会を先生や大人が与えてくればもっと発展していくんだろうな、という意見があった。PTAの方たちが初めて参加してくれてありがたい。

学校で英語教育を取り入れることによって国際理解のきっかけになる。また、地域の公民館で行事を色々行うが、そこに積極的に外国人住民を呼んでコミュニケーションをとっていくことはすぐに取り組めること。

我々の班には横田会長がおられ、一番大事なことは愛であるという横田会長の言葉で締めさせていただく。

#### N（長坂さんを中心としたグループ）

河原さん： 地域ができることは何かということを話し合った。今までのグループと同じで大人がまったく理解していない。そうかと言って大人が変われるのかということなかなか凝り固まっている。いかに青少年に舞台を提供できるかということに尽きる。

地元在住の方から、自分の仲間は、行く大学もない企業もないという理由でこの地域から離れていると話があった。学校、経済の活性化が当然必要。コミュニケーションについては飯田のことを知らなければスタートできない。地域の歴史をもう少し勉強する機会を増やすことが大事。留学生は、飯田の中学生等の掃除の姿勢やゴミがないことに感銘し

ている。子どもが豊かな自然や地域の良さを理解してもっとPRしていくことが必要ではないか。

私見を交えると、外国人労働力を導入しているということは必要なこと。グローバルな交流というのは多文化共生社会の原動力になる。

あまり国際化といった事に特化しない普遍的な青少年教育そのもので人との関わり方を学ぶ、漠然とした言い方になるが飯田市が取り組んでいる「地育力」、まさにその通りでさらなる成果を期待する。

純粹多感な高校時代に留学することは、非常に意義がある。受け入れる地域・家庭も感化されていくので、私も今日ここにきてこの重要性を改めて認識した。地域に受け入れる方が数が少ない、原因は学校の単位の問題もあるが何よりホストファミリーとして受けてくれる家庭が少ないということに尽きる。ホストファミリーの発掘やその対策に関係機関が連携して実績を上げていくことに期待する。飯田国際交流推進協会が提案しているインタースクールの設立にも関係する。

#### 吉澤コーディネーター

共通してまとめていただいた内容をかみしめると、私たち大人や地域が青少年を交えながら一緒に考えていかなければいけないのではないかと感じる。協会として個人として団体として今日のシンポジウム・グループワークを受けて何をどう取り組んで行ったらいいかというヒントを頂き、また考えて行かなければならないような気がする。これからの国際交流推進協会の活動に協力をお願いしたい。

特に高校生のみなさん、今まで参加した会議やイベントに多くの方たちを交えて出て頂けたら有難い。大人も、是非経験されてない方、された方ももちろん、その場に来て体験を続けてやっていただきたい。

今日は本当にありがとうございました。

しゅさい いいだこくさいこうりゅうすいしんきょうかい  
主催 飯田国際交流推進協会